

受領者投稿

中部大学 工学部 情報工学科 教授 平田 豊  
(第15回受領者)

平成12年3月末、私は米国でのポストドク生活を終え、現在の大学に講師として赴任しました。講師から独立した研究室を持つところに最大の魅力を感じ、大きな希望を胸にしての帰国でした。しかし、現実は甘くなく、赴任早々壁に当たることとなります。

新任教員に対し、米国では2000万円ほどの研究室立ち上げ資金が支給されると聞いていたのに対し、本学では、PCが一台支給されただけでした。その一方で、初年度から14名の卒業生が研究室に配属され、一体彼らとどんな研究をすればいいのかと途方に暮れました。

こうして、がらんとした暗い小さな部屋で、1台の新しいPCと先輩教員から頂いた数台の中古WSを、埃とカビまみれで大学倉庫に眠っていた机の上に並べた状態で、私の研究室はスタートしました。春学期から担当した2つの講義科目と1つの演習科目の準備に追われながら、米国で取り溜めた実験データを学生達と解析するスタイルの研究から取りかかり、残りの時間を使って、目に付いた研究助成募集に片っ端から申請しました。

平成13年度には科研費をはじめ、応募した全ての財団からの助成を頂くことができ、PCの数も増え、安価な実験装置も購入できました。次の年も同様の幸運に恵まれ、複数の助成財団

からご支援を頂き、ようやく研究室らしい研究室になってきました。助成額が大きくなり、競争率が高いと聞いていた立石科学技術振興財団には、平成15年度の助成募集に初めて応募しました。結果は不採択。その年、基礎データをさらに増やし、平成16年度の助成に再度挑戦。今度は見事、採択して頂きました。その時、購入させて頂いた神経生理実験の装置は、今も現役で毎日実験に使用しています。

立石財団については、他の財団と比べ助成額が大きかったことの他に、強く印象に残っていることがあります。それは、助成金交付式でのことでした。交付式は、私が助成を受けた全ての財団で開催されましたが、立石財団の式では、オムロンの若手の研究員の方も大勢参加され、大変積極的に我々に話しかけられ、研究内容についてご質問やコメントをくださいました。オムロンが革新的な研究開発を次々に展開される源泉がここにあるのだと合点したことを今でも覚えています。

